

第59回 Kozoom 「お百度詣りで思うこと」

清水健二

我々が過ごす生活の中の習慣は時代と共に、変化したり消滅してしまうものは随分多い。庶民の生活に関わる習慣は概して江戸時代に日常化して今日に継続して、日本人の習慣文化となってきた。

私の母親は朝起きると、太陽に向かって手を合わせ祈っていた。子ども心に母のその行動に何の抵抗も無く、いつものことであったからである。農家出身の母は代々太陽を中心に自然の恵みに対し崇拝と感謝の心を教えられて育ったからだと後年になって解った。今の時代にそんな行動を取る習慣文化は失せてしまったように思う。

昔の集落には必ず神社と寺が存在していて、日常にお参りをして、家内安全や健康、厄払いや先祖への供養に花を手向け線香を点てていた。願い事があればひたすら社寺に通い続け、百度をいわず祈願したことから「お百度詣り」が普及していった。私の住む地域のすぐ近くに常光寺という古刹があり天満宮もある。東には八尾神社、西に穴太(あのう)神社がある。この穴太神社は聖徳太子の生母である、間人穴穂部(はしひと あなほべ)皇后の生誕地であり、ここで成人した地でもある。これらの寺社は日頃の私の散歩路でよくお詣りする。夫々の境内には「お百度石」があるが、お百度を踏む人は見たことは無い。しかし関西で今でも「お百度詣り」で賑い、参詣者が多くて有名なのは、東大阪市にある「石切さん」である。私達大阪人には子どもの頃、でんぼ(腫物)の神さんとして馴染のある神社で、近鉄奈良線の石切駅から歩いて15分程度の所に、石切劔箭(つるぎや)神社が正式名である。ここでは列をなして百度石をはさんで歩いている人達が見られる。もともと願い事があれば寺社に何回も通い念ずることから始まったが、本殿前に百度石を立てて一気に百回祈願する形にしたことから普及し、継承されていったようである。石切神社では本殿手前と約30m離れたところに百度石が立っていて、百回廻ると約3kmになる。一



石切神社のお百度踏み



八尾神社の百度石



縁結びの地主神社

一般的に本殿前と百度石の距離は15～20m位で、お百度を踏むと1.5～2kmを歩く事になるから、足の弱い人は大変である。回数を間違



お百度勘定紐

わないように手に100本の紐を束ねたものを持って確認して歩き続けるが、都度願い事を本殿に向かって、あるいは歩きながらつぶやいている。中には一度に達成せず日をまたいで別の日に続けるようで、単にお祈りするだけでなく自らの体力を駆使し強い心で、誓いをたて祈願を行なっているから真剣な表情がうかがえる。



八尾穴太神社の百度石

お百度詣りは平安時代から行われていたようであるが、比叡山延暦寺では天台宗の僧侶が行う千日回峰行(せんにかいほうぎょう)や高野山で行われる寒中水行は真冬に冷水を浴びて身を清めている。特に日本中あちこちで、四季を問わず滝に打たれながら、忘我の世界に入ったり、断食などをして自身の身体を鍛え、煩惱を乗り越えて仏の道を求め続ける人など、誓願と祈願の厳しい自己努力は、一般庶民ではそうした荒行はできない。しかしお百度踏みなら家族の病氣平癒や難関達成など、願掛を自らの覚悟を形にし認識できることから庶民化してきたと私は推測している。



奈良青葉寺の滝行



高野山の寒中水行

日本人は古くから、願い事を叶えるために神仏にすがるといふ信仰心を大切にしてきた。神社では絵馬に願いを書き、寺でもお守りやお札を授かったりする人達が多い。関西の西国霊場33箇所巡りや、四国の真言霊場88箇所巡り、秩父の観音霊場34箇所巡りなど信仰心の厚い人は自己鍛錬を兼ね出かける人も多い。中には、富士山、御嶽山、立山など霊山に挑戦する人もある。体力に自身のない人は、写経をして祈願と供養、そして心の修養をおこなっている人達は意外に多い。

一方他力本願的なところでは祈願一筋の人もあるが、「縁切り」を願う人のための神社が存在していることに驚いたことがある。自分のみならず、相棒のことを思い悪縁や悪運、浮気、賭博好き等々から開放したい願いを込めて行っている。言われてみると縁を切りたいことに切実感を持っている人がよく訪ねる処として、京都の清水寺境内に地主(じしゅ)神社がある。ここは悪縁を切って良縁を結ぶ、いわば縁結び神社である。水に溶ける人形(ひとがた)に願いを託せる仕掛けを設けている。また「百度石」ならぬ「恋占の石」が



京都安井金比羅宮の縁切り石

あって若者たちが集まり、その石から離れたもう一つの石まで、目を瞑って歩き無事にたどり着いたら恋が成就するという他愛のない占いだが当事者は真剣にやっている。また清水寺から近い所に安井金比羅宮という神社は縁切り神社として有名で、大きな石の地面近くに穴が開けてあり、この穴をくぐると縁が切れるという仕掛けである。結構くぐる人が多く順番待ちの賑いである。

日本人は特定の宗教観を持たなくても、日常から信仰心を大切にしてきた。自由に自分自身の内面を見つめ直し前向きに生きようとする人が自己鍛錬を志し、神仏に力をもらい、自力で願い事を引き出していこうとする意欲の人に私は敬意を抱いてきた。自分の生き方を探りながら、他人の幸せのためにも祈願をする生活習慣文化を育み継承したいものだとは常々思っている。最近は何故か殺傷事件が度重なり、暗い報道が多く心が痛む。社会全体が支え合う明るい話題を提供する事を報道し、人々を啓蒙して行く世の中を願う今日この頃で



地主神社の「恋占い石」

ある。

令和7年5月記